

## 第2章 発達障害者支援におけるアセスメントの重要性

### 1 発達障害者へのアセスメント実施の状況

アセスメント技法を開発するにあたり、就労支援機関等に対して、就労支援における発達障害者へのアセスメントに関するアンケート及び聞き取りを行いました（表2-1）。この結果からも発達障害のアセスメントにおいて、支援者は様々な課題を感じていることがわかります。

表2-1 発達障害者へのアセスメントにおいて困難さを感じる点

困難さの分類	回答内容（一部）
1.本人からの聞き取りによる状況把握が困難（本人以外の情報源がない）	<ul style="list-style-type: none"> <li>関係機関との関わりがなく、本人のみから情報を得る場合、本人視点の情報しか得られない</li> <li>聞き取りした感覚特性が、日常生活や仕事にどの程度影響があるのかアセスメントしづらい</li> <li>学生等、就労経験の少ない方の場合、課題を引き出しづらい</li> </ul>
2.自己理解の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>診断後間もないため、日常生活等で困っていることに気づけない</li> <li>一般高校や大学卒業者等は、学業には問題がなかった、仕事のイメージが持ちにくい、本人が困っていない等の理由から課題を共有しにくい</li> <li>医療機関等で受けた検査結果を持っていても、「もらって終わり」になっており、具体的な生活上の困難さと結びついていないことが多い</li> </ul>
3.就職前にアセスメント情報を十分把握することが困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>アセスメント場面では把握できなかったが、実際の職場に入ってから、障害特性や課題が顕著に現れることがある（見逃しがある）</li> </ul>
4.アセスメント実施に伴う負担感	<ul style="list-style-type: none"> <li>相談時に話が拡散してしまい、聞き取りに想定以上に時間がかかる</li> <li>コミュニケーションが苦手な方であまり話をしないとき、どう聞き取りを進めればよいか迷う</li> <li>自分が困っていることを言語化しづらい場合、聞き取りが進まない</li> <li>生活面の課題は、本人にとって「当たり前」であり、困っていないため自発的な訴えがない場合がある</li> </ul>
5.コミュニケーションのアセスメント方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>一対一の面談や本人の単独作業の観察では、コミュニケーション面がアセスメントしづらい。集団場面でのコミュニケーションの課題が把握しづらい</li> <li>本人の言葉の使い方、意味の捉え方に関するアセスメントツールがあるとよい</li> </ul>
6.アセスメント結果のとりまとめ方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>アセスメント情報の整理やまとめ方が、各支援者の経験やスキルによって異なる場合がある。より一般化された形式のものがあるとよい</li> <li>対人スキルの程度、障害特性に起因する生活や集団行動上の支障等を数値化できると説明しやすい</li> <li>自閉スペクトラム症、注意欠如多動症(ADHD)等、それぞれの障害特性に関する情報をどのように整理すればよいか</li> </ul>

7.アセスメント結果の伝達の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害認識や受容が進んでいない方の中には、アセスメント結果を客観的に伝えても、説明が入っていかない方もいる</li> <li>• 特性が把握できても自己理解が進むまでに時間がかかる</li> <li>• 自己評価と他者評価に大きな差がある場合、どう伝えれば本人の理解が進みやすいのかについて知りたい</li> </ul>
8.その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 復職支援サービスを受けている方の中に発達障害の特性が強く現れている方が増えてきている</li> </ul>

## 2 発達障害者のアセスメントは、本人を「理解」するために行う

発達障害の障害特性は「生まれつきの特性」であり、それ自体に良いも悪いもありません。「仕事をしたい」と考え、就職や復職をしようとしたときに障害特性が何らかの支障となる場合にのみ、支援や対処を行う必要が出てきます。そして、意味ある支援や対処を行うには、何が支障となるのか理解する必要があります。

アセスメントは、支援を必要とする発達障害者本人のことを、本人を取り巻く環境を含めて「理解」することを目指しています。発達障害者を理解するというときの、「理解」には複数の意味が含まれています（表2-2）。就労支援を行う際、「企業や関係機関等に障害に対する理解を求める」場面がありますが、どの種類の理解を求めようとしているのかを意識しておくといよいでしょう。

表2-2 支援に必要な3つの理解

理解の種類	内容
1.発達障害に関する正しい知識を有している	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発達障害の定義、症状、特徴、関連のある障害、起きやすい問題等、発達障害に関する医学的、教育的、心理的情報等を知っている</li> </ul>
2.発達障害者の抱える困難さ、生きづらさ等に共感する努力をしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発達障害者の感じている困難さがどんなものなのか知ろうとする努力をしている</li> <li>• 障害特性等に伴って、何かが「できる」「できない」だけではなく、「できない」ことに伴う困難さやつらさを感じ取る努力をしている</li> </ul>
3.目の前の一人の利用者を個別に理解する努力をしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発達障害に関する知識を、「発達障害だからミスが多い」や「対人トラブルが多いのは発達障害だから」といった決めつけやレッテル貼りに用いずに、同じ発達障害との診断が出ていても、一人ひとり抱えている障害特性には違いがあり、これまでの経験も感じている困難さも、異なることを前提として支援を行っている</li> </ul>

### 3 開発のコンセプト

関係機関からの聞き取りや WSSP での支援を通じた情報収集の結果等を踏まえ、アセスメント技法の開発コンセプトを以下の4点としました。アセスメント技法の全体構成は図2のとおりです。

#### (1) 発達障害の特性を「広く、浅く」収集する

発達障害の障害特性の現れ方は個人差が大きいと言われていています。また、個人の中でも感覚や運動機能に関するもの、物事の捉え方や学び方に関するもの等、広範囲にわたって特性が現れます。そのため、障害特性には自他ともに把握しやすいもののほか、本人や周囲も気づかない捉えにくいものもあります。一方で、そのような発達障害の特性をアセスメントする方法は、これまでに数多く開発されています。

それらを踏まえ、障害特性の見逃しを極力減らすために、「広く、浅く」特性を収集できることを主眼に置き、「特性チェックシート」を開発しました。支援を行う上でさらに詳細情報が必要な場合は、その特性の把握に特化したアセスメント方法を用いて確認します。そのように既存のアセスメント方法と組み合わせることで、より網羅的で詳細なアセスメントが可能になるのではないかと考えました。

このように、困難さの所在を大づかみで捉えることで、今後行うべきアセスメントの方向性を見極めやすくなり、本人と支援者のアセスメント実施に伴う負担を減らすことができます。

#### (2) 発達障害に関する知識がなくても記入できる

「特性チェックシート」は、本人や保護者等、記入者に発達障害の特性に関する特別な知識がなくても記入できるように、日常的な場面での出来事をイメージしやすい質問構成にしています。

障害特性の中には、本人、保護者でも気づきにくいものもあります。また、未診断の方や診断されて間もない方の場合は、日常的な困りごと等について気づいていないことが多いかもしれません。具体的に質問されてはじめて自分のことを振り返ることができ、障害特性に対する気づきにつながる可能性が高くなります。

アセスメントを実施する側が、障害特性の現れ方の実態を知らないと、本人や保護者に対して「障害特性がどのように生活場面で現れるのか」、そして「どの点で困っているのか」等、確かめるための質問を行うことができません。「特性チェックシート」はその点を補うことができます。

#### (3) 職業上の課題の背景を情報処理過程に沿って推測し、整理する

発達障害者の職業上の課題については、見えている現象だけではなく、その背景について考えることが重要です。起きている課題と発達障害者の認知特性の関連を推測し、整理することで課題の背景を意識しながら支援方法を考えやすくなります。

そのような考えのもと、WSSP では、これまで情報処理過程の枠組みに発達障害の障害特性を配置した「情報処理過程におけるアセスメントの視点 (Ver.9)」によるアセスメン

トを実施してきました。今回の開発では、その内容を再検討し、より活用しやすく改善した「情報処理過程におけるアセスメントの視点 (Ver. 10)」を作成しました。

#### (4) 問題の具体的な原因推定と支援方法を考えることができる

職業上の課題には様々なものがあります。支援者には、その原因を推測し、具体的な支援方法を考えて実行し、改善することが求められます。発達障害の障害特性は、職業上の課題を生じやすくする要因の一つとなる場合がありますが、障害特性そのものが課題の原因ではありません。そのため、障害特性を把握するアセスメントだけではなく、問題改善を進めるための具体的なアセスメント方法も必要となります。そこで、問題の原因推定と具体的な支援方法を考えるための「行動/環境アセスメント」を開発し、本人の行動と思考、環境要因全体を含めたアセスメントができるようにしました。

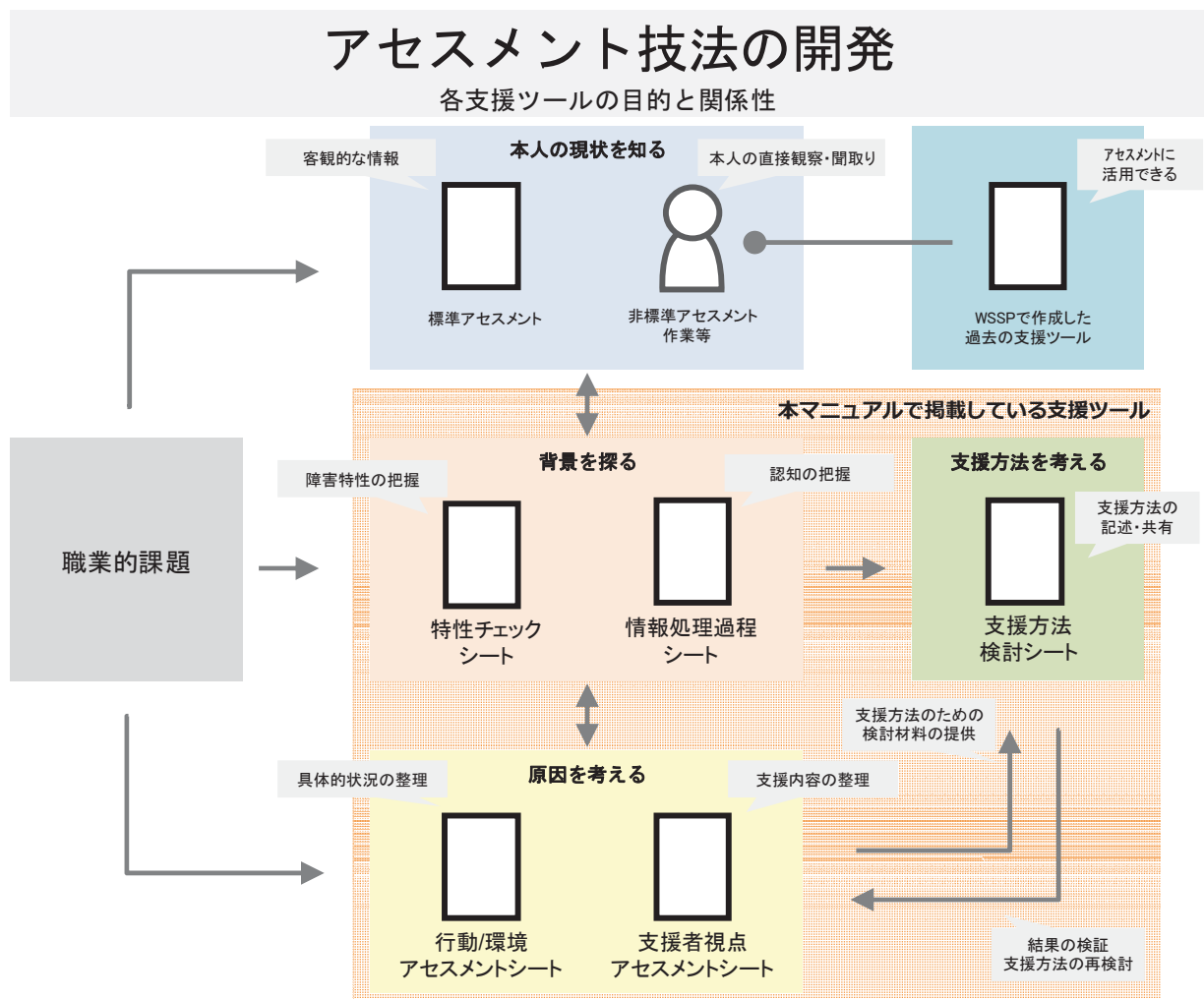


図 2 アセスメント技法の全体構造